

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 9-5

遊 び (2)

目次

要約	2
はじめに	6
1. いつ、どこで、何を	7
● 友だちとの遊びのようす	7
● 外遊びと室内遊び	13
2. 遊びを支えているもの	19
● 友だちと遊ばなかった子ども	19
● 時間、空間、仲間	22
3. 遊び体験の変化	26
● 失われていく遊び	26
● 失われていく遊び体験	29
4. 遊ぶ子、遊ばない子	32
● 遊び欲求の変化	32
まとめに代えて	38
地球社会の子どもたち ⑩ 日本—その3 明治30年代の子どもたち	深谷昌志……39
資料1 調査票見本	45
資料2 学年・性別集計表	54

※おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>					
<input type="checkbox"/>	調	査	レ	ポ	ー	ト	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	遊	び	(2)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	要	約	<input type="checkbox"/>				

東京都目黒区立菅刈小学校教諭 土橋 稔
 東京学芸大学教授 深谷和子

1. 放課後、友だちと遊んだ子

調査対象となった3月中旬の晴れた日（雨天率13.0%）に、放課後、家へ帰ってから友だちと遊ばなかった子は、53.5%にもものぼっている。（図1、図2）



2. 何人と遊んだか

遊んだ子についてみると、2人から3-4人が全体の56.6%と少人数化が顕著である。とくに4年から5年にかけて少人数化が進み、また男子より女子にこの傾向がみられる（図3）。また同じクラスの子が8割近く（図4）と同質性も、よく指摘されたとおりである。

3. 約束して遊ぶ

あらかじめアポイントメントをとって遊んだ子が、全体の3分の2に達している。(図5)



4. 友だちと遊んだ時間

遊んだ子についてみると、1時間か、それ以下が3割弱だが、3時間以上も同程度はおり、分散が大きい。(図6)

5. 友だちと遊んだ場所と活動レベル

外だけで42.5%、家の中だけで24.3%、家の中と外の両方で33.2%。やはり女子のほうが内遊びが多くなっている(図8)。また活動レベルも、小学校4、5、6年としては期待される数字ではなく、「汗が出るくらい動いた」が27.2%、「わりと動いた」27.8%と合わせて55.0%でしかない(図9)。ここでも女子が不活発である。



6. なぜ友だちと遊ばなかったか

この日、友だちと遊ばなかった子についてみると、「塾や習いごとに行った」「なんとなく」「用事があった」が上位の3つである。(図12)



7. 予定のある日

週のうち放課後に6日間予定をもっている子が13.7%、5日間13.9%、4日間17.7%と、半分以上予定のつまった曜日をもっている子は5割近くにもなる。(図14)



● 調査概要

1. 調査主題 遊び

2. 調査視点 子どもたちの遊ぶ姿を見かけなくなってきた。塾、おけいこごとで、忙しい毎日をすごしていると言われる子どもた

ちの放課後の遊びを細かく調査することで、実態を明らかにしていきたい。

3. 調査項目 放課後の予定、一緒に遊ぶ友だち、遊び場の有無、休み時間の過ごし方、遊んだことのある遊び、遊び体験、遊びについての考え、など。

8. 遊び経験

遊び経験の内容が、昔と比べて大きく変わっている。(図18)



9. なぜ遊びが……

遊ばない子が一般化する中で、現代でもよく外遊びをする子もいる。その中にある条件を探ってみると、外遊びを好む子は「友だちが多く、食欲があり、努力型で、自分の上に明るい将来像を描くタイプ」が見いだせる(表6～表9)。こうした積極性に富み、活力ある子どもたちの姿を一般化するため、おとなたちは何をすべきか。改めて真剣に考えてみる必要があるだろう。



4. 調査時期 1989年3月
5. 調査対象 東京、千葉、神奈川の小学4・5・6年生
6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査

7. サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
4年	318	224	542
5年	218	214	432
6年	99	95	194
計	635	533	1,168



はじめに

かつて子どもとは「遊ぶもの」であった。有史以来今日まで、子どもたちは遊びの中から、おとなになったとき必要な生きる力を獲得しながら成長してきた。友だちと外を走りまわることにより体力をつけ、健康を育て、また遊び仲間との活動を通して、社会性や自主性を身につける。

ところが近年、次第に子どもたちの遊びまわる姿を見かけることが少なくなってきた。放課後どこを探しても、子どもを見ない。町の通りにも、公園にも、建物の陰にも。ましてや休日になると、学校の校庭でさえもひっそりと静まりかえってしまう。毎日学校に登校してくる子どもたちは、どこに消えてしまうのだろう。

これまで『モノグラフ・小学生ナウ』でわれわれは、折にふれて子どもの遊びに関する問題点を指摘してきた。現代の子どもたちの発達をさまざまな角度でとらえていこうとすると、必ずその問題の根源に、現代の子ども

の遊びの変化が関わっていたからである。子どもたちは、まさに遊びを通して成長する。しかしその遊びの姿が今日、大きく歪んでいるのではなかろうか。

本調査は、現代の子どもたちの遊び実態を細かく調査することを目的とした。それを、子どもの成長にとって一番自由な時間である放課後の姿を追うことでとらえようとした。調査日は、平成元年3月。調査対象は4年542名、5年432名、6年194名、計1,168名。東京を中心とした都会っ子の遊び白書とも言えそうだ。

お断りしておきたいことは、卒業を間近にひかえた6年生は、さまざまな学校行事をかかえ調査しにくく、調査サンプルが少なくなっていることだ。また、小学校の卒業と、中学入学の直前という特別な時期であったことも考慮しながら結果を読みとっていく必要もありそうだ。

1. いつ、どこで、何を



放課後の実態をより明確にするために、ある特定の日を選び、「昨日、学校から帰って友だちと遊びましたか」と尋ねてみたのが図1である。図が示すとおり、「友だちと遊んだ子」は46.5%と、半数にも満たない結果である。学年別にみていくと、4年生が55.9%と一番高く、卒業を間近にひかえた6年生が52.0%とほぼ同じ。ところが、もうすぐ6年生になる5年生で、友だちと遊んだ子は、なんと33.5%しかいない。そして女子の遊びの少

なさが目につく。6年進級をひかえて、5年生とは受験を視野に置いた「勉強のとき」なのか。

その日の天気は図2に示すとおり、晴れ64.2%、くもりを含めると9割近くに達する。3月中旬のおだやかな晴れた日。外遊びには、絶好の条件であったにもかかわらず。

次に、この半数弱の子どもたちの遊びの様子を細かく追ってみる。

◆◆ 友だちとの遊びのようす ◆◆

当日何人で遊んだかをみたのが、次の図3である。「自分を含めて3～4人」が最も多く、33.8%。次いで「2人」が22.8%と、5割以上の子どもたちは、小さなグループで遊

んでいる。そして、少ない人数で遊ぶ傾向は、男子より女子のほうに、また学年が上がるにつれて顕著になっていく。しかしその一方で、4年生男子を中心に、5～6人、7～8人、

図1 帰宅後の遊び

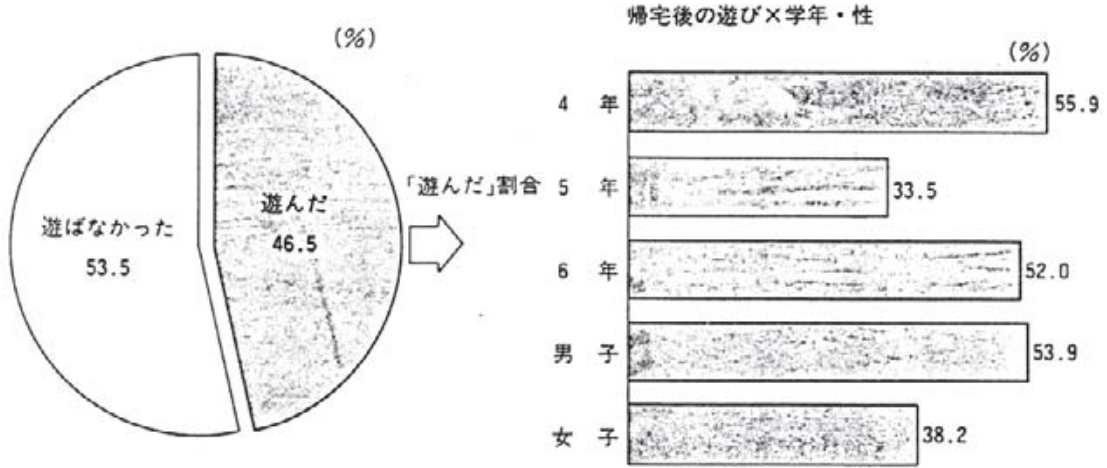
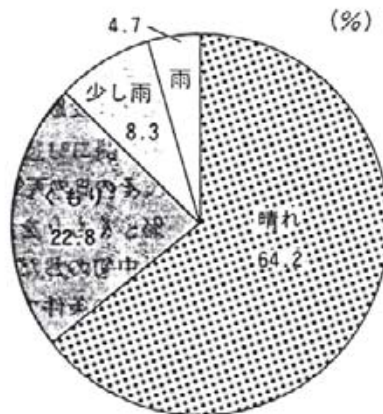


図2 調査対象日の天気



9人以上という、わりと大きな遊びグループの存在も認められる。

そして遊び友だちは、図4に示すとおり、8割は同じクラスの子である。その中に、違う学年の子、他クラスの子の存在もみうけられるが、数値は低く、放課後も学校の仲間集団が中心であり、地域の遊び仲間はほとんど存在していない。そのことは、図5の友だちが集まった理由からも想像できる。「遊ぶ約束をあらかじめしていた」者65.2%と、今の子どもたちの遊びは、日常的、偶然的なものではなく、約束の中で成り立っている。そのため遊ぶ約束のしやすいクラスメートに、放課後の遊び仲間が固定されていくと言えよう。

次の図6には、遊び時間を示した。一番多いのが1～2時間の26.2%、3時間以上遊ぶ子ども4分の1程度いる。放課後、帰宅時刻を3時とすると、それから3時間余り、6時すぎの暗くなるまで遊んでいる子もいる。子どもたちは遊ばなくなったと言われているものの、

遊び出すとかなり長時間遊んでいる様子もみうけられる。もっともこの数値は、放課後友だちと遊んだ半分弱の子どもたちの数値であるから、そのうちの4分の1、つまり全体の10%余りの子どもについての結果ではあるが。

そこで気になるのは、何をして遊んでいたかだろう。「どんな物を使って遊びましたか」と尋ねた結果を図7に示した。外遊びの代表は、サッカーや野球のようにボールを使っての遊びで約3分の1の子が、男子だけみると半数近くになる。また室内遊びとしてはテレビゲームが約3割程度。これも男子のほうに多くみうけられる。そして、女子はおしゃべりをしているのか、「何も使わないで」が25.2%と1位で、「その他の物を使って」が21.9%と、遊びの様子がみえにくい結果となっている。女子に、男子の野球、サッカーなどにかわるような放課後の遊びが出てこないのはなぜだろうか。

図3 遊んだ人数(遊んだ子について、以下同じ)

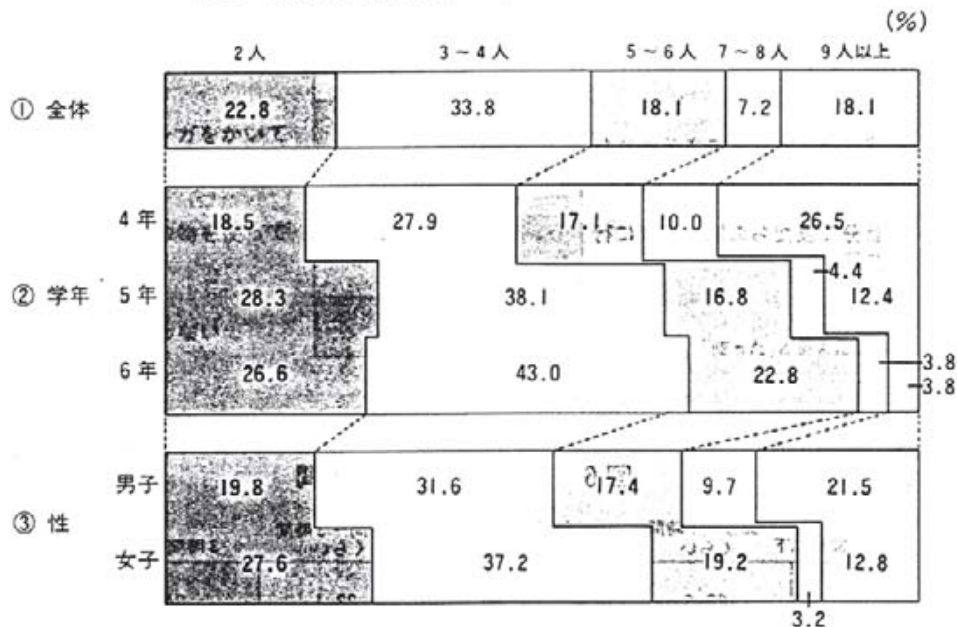


図4 遊んだ人

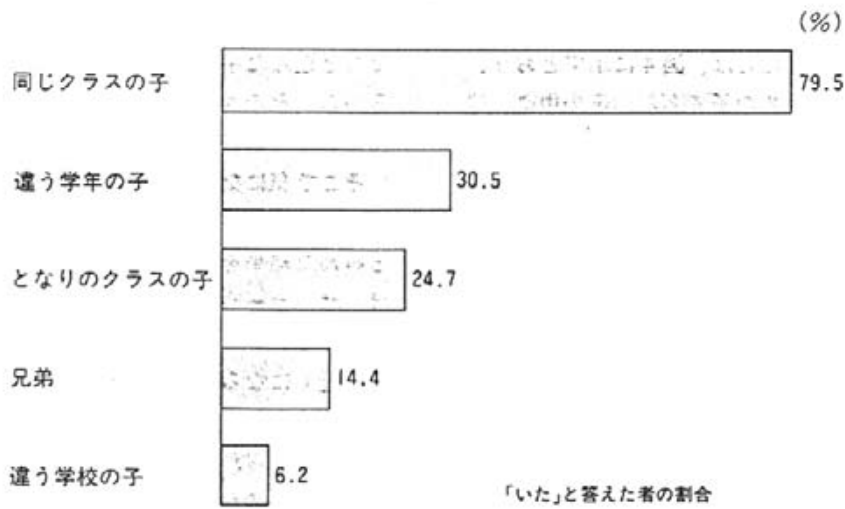


図5 友だちが集まった理由

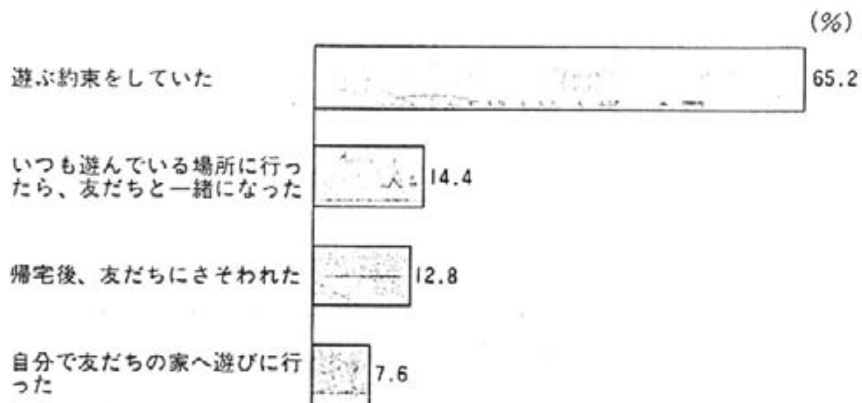


図6 友だちと遊んだ時間

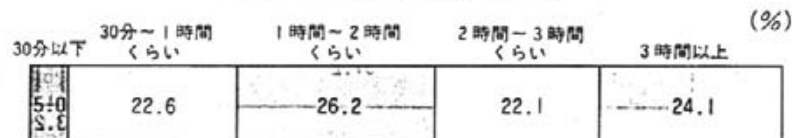


図7-1 何をして遊んだか(全体)

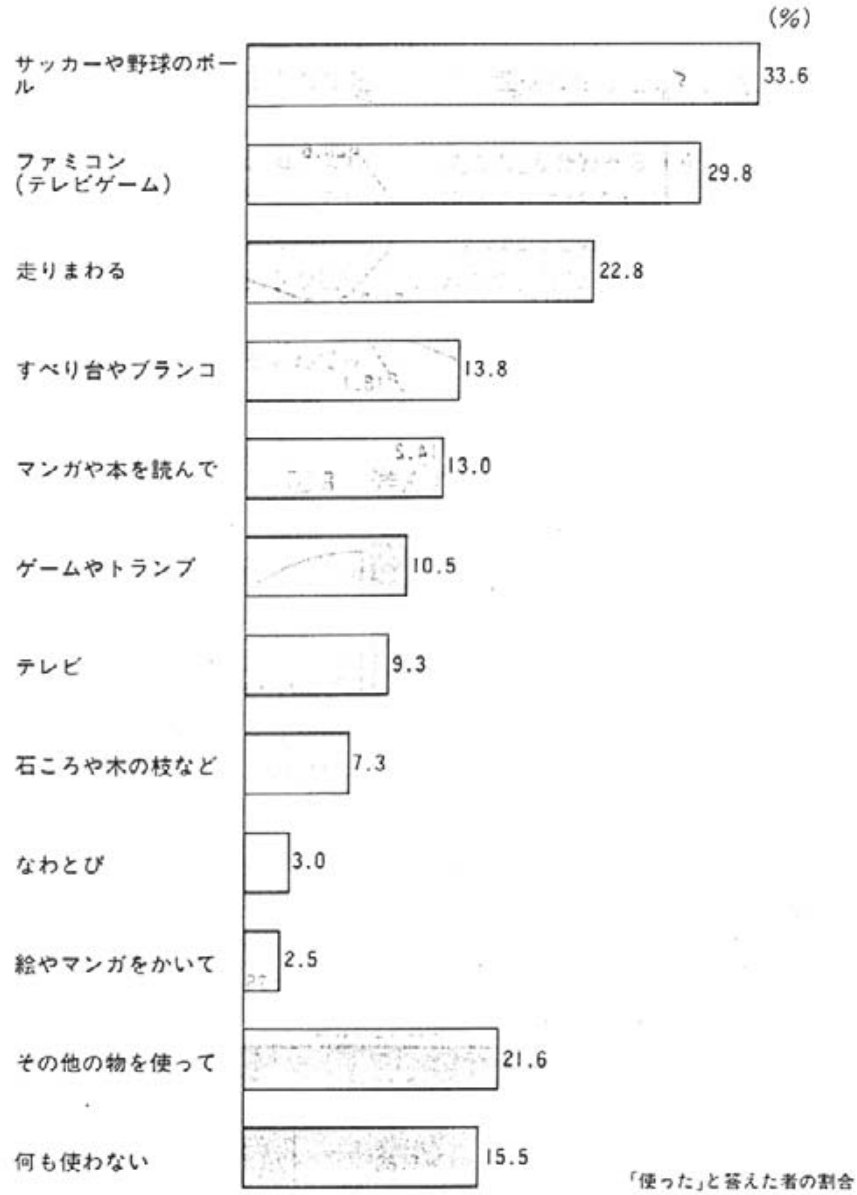
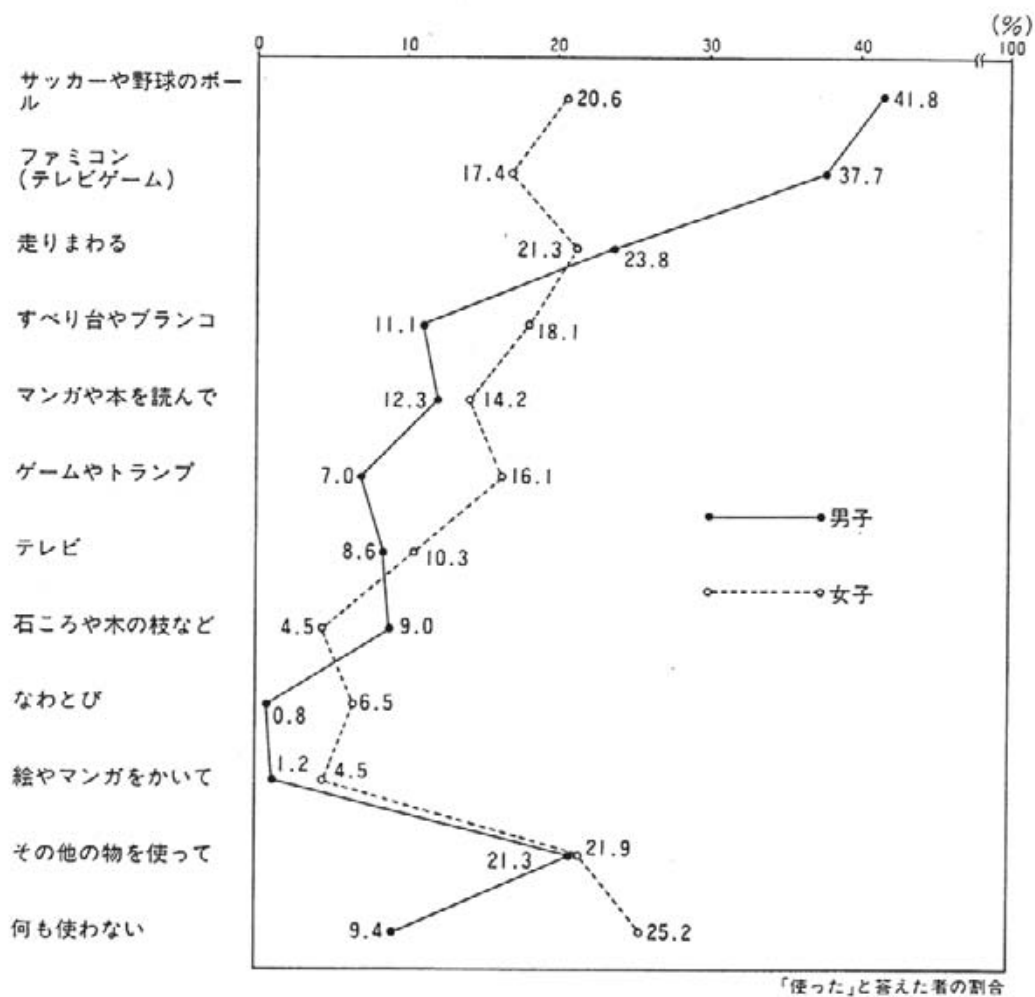


図7-2 何をして遊んだか(性別)



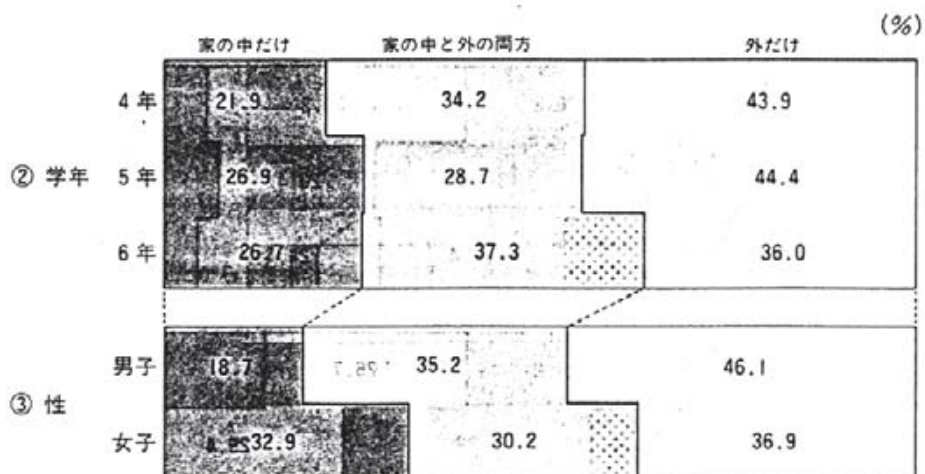
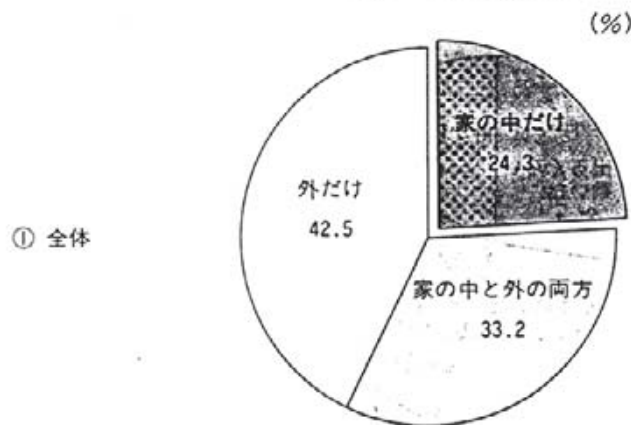
外遊びと室内遊び

これまでは、友だちと遊んだ子どもたち全体についてみてきたが、同じ友だちと遊んだといっても、室外で野球をしたり、走りまわったりしている子と、室内でテレビゲームをしたり、おしゃべりをしたりして遊んでいる子どもたちでは、遊びのもつ意味に大きな違いがあるはずだ。

そこで子どもたちの遊んだ場所を尋ねてみ

た。図8に示すとおり、「家の中だけで遊んだ」者が約4分の1おり、「家の中と外の両方で遊んだ」も合わせると6割近くになる。それだけに活動の様子を尋ねた図9をみると、調査日はほとんどの地域でよい天気だったにもかかわらず、「汗が出るくらい動いた」子は全体の4分の1しかいない。「少し動いたくらい」「静かに遊んだ」という活動性の低い者が全

図8 遊んだ場所



体の半数近くになる。そしてそれは、室内遊びの多い高学年になるにつれ、また男子よりも女子のほうに顕著である。

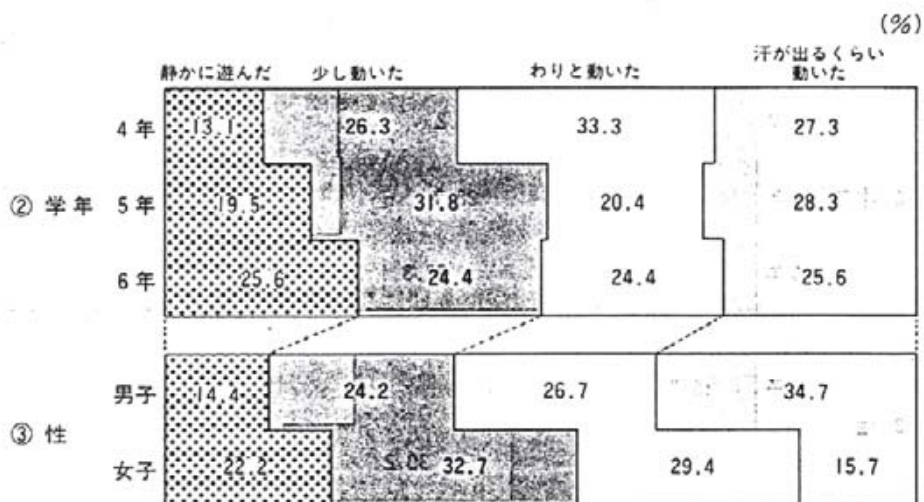
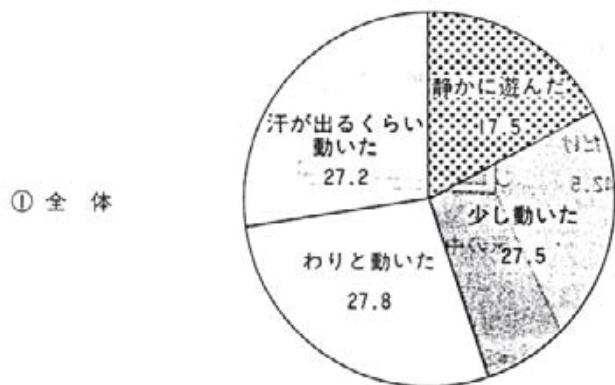
ではこの約半数の子どもたちは、なぜ室内で遊ぶことになったのか。図10に示したとおり、「外遊びができるような遊び場がない」といった物理的要因ではなく、「家の中で遊ぶからだから」と、4分の3の子どもたちが答えている。外で遊びたくても遊び場がないのでしかたなく家で遊んだのではなく、家の中で遊びたかったのだろう。そして家の中でしたことと言えば、図11のように、「おしゃ

べり」「テレビゲーム」が6割を超し、それが室内遊びの魅力になっているようだ。

もう少し詳しく、外遊びの子どもたちと、室内遊びの子どもたちが、どのように遊んでいるかをみよとしたのが、次の表1～表5である。

表1に示すように9人以上とか、7～8人という大きなグループを作っていたのは、外遊びのグループであり、室内遊びが中心の者は「3～4人」が半数近くを占め、4人以下での少人数の遊びが74.9%に達する。表2の遊び仲間についても、外遊びの子どもたちは

図9 活動のようす (%)



自分のクラスを中心としているが、となりのクラスをもまきこみ、他の学年とも一緒になりながら遊んでいる様子がかがえる。表3で一緒に遊んだ理由を遊び場ごとにみていくと、家の中だけで遊ぶ場合には、母親の了解をとらなければならないのだろうか、ほとんどが遊ぶ約束をした結果である。たまたま、友だちの家に行ってその家で遊んだという者は、わずかである。一方、外遊びは約束した割合も高いが、「いつもの遊び場に行って友だちと遊んだ」という子どもたちも24.0%いる。外遊び中心の子と、内遊び中心の子との友だちの関わりがみえてくる結果である。また、遊び時間は表4に示すとおり、家の中で遊んだ者は、30分～1時間が30.3%と、他の遊び場に比べると、やや少なくなっている。外遊びはグループによってまちまちであり、30分～1時間の者も、3時間以上の者も、それぞれ2割強ずついる。また、3時間以上という長時間遊んだ子は、家の中と外の両方で遊んだ子どもたちの中に多くみられる。

参考までに、遊び場と天気の関係を表5でみたが、天気と遊び場にはほとんど相関がなかった。子どもたちは天気がよくても悪くても、外で遊びたい子は外遊びを、室内で遊びたい子は内遊びをしている。

これまでの結果をまとめてみると、遊びの中で最も大切な「いろいろな仲間と一緒に汗を流して元気よく遊ぶ」といった遊びの中に含まれる集団性、活動性の条件を満たしていた子どもたちは、友だちと(46.5%)、さらに外で(42.5%)遊んだ約2割の子どもたちであり、残る8割は、創造的で活動的な遊びとはほど遠い放課後をすごしている。これらの傾向は、これまでも多くの人びとによって観察され報告されてきたことではあるが、改めて調査データの上にこれが指摘されるとひとしおの感慨がある。おとなたちの多くが抱えているあの子ども時代の「遊びにあけくれた」日々の輝きは、どこへ行ってしまったのか。

図10 家の中だけで遊んだ理由

	とても+わりとそう		あまり ぜんぜん そうでない そうでない	
	25.0	74.5	11.1	14.4
家の中である遊びだったから	25.0	74.5	11.1	14.4
外に遊ぶ場所がないから	25.0	23.8	51.2	
天気が悪かったから	17.1	18.3	64.6	
外で遊ぶのが面倒だったから	9.6	27.7	62.7	
疲れていたから	9.6	34.9	55.5	

図11 何をして遊んだか(家の中だけで遊んだ人)

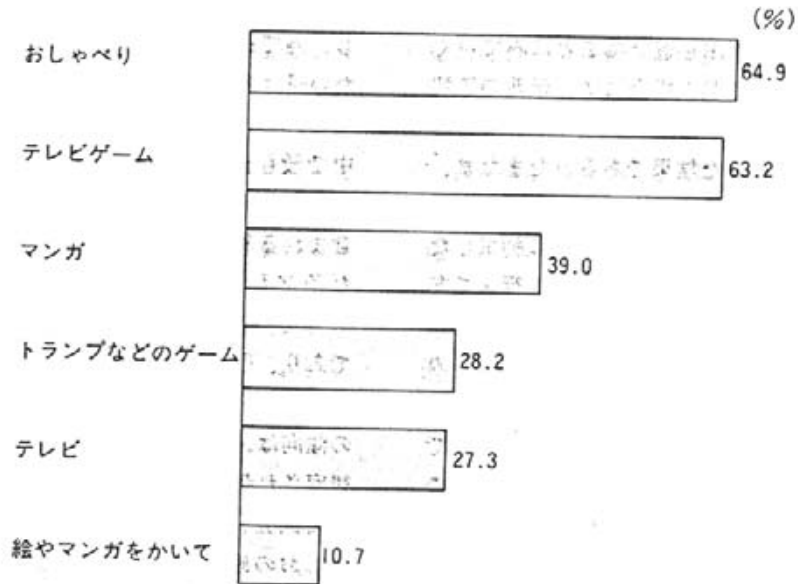


表1 遊んだ人数×遊び場所

遊び場		人数		
人数	遊び場	家の中	中と外	外
2人		31.5	28.6	13.7
3~4人		43.4	34.0	29.2
5~6人		20.7	17.5	18.0
7~8人		2.2	5.6	8.1
9人以上		2.2	14.3	31.0

○印は、横列の最大値

表2 一緒に遊んだ人×遊び場所

(%)

一緒にいた人 \ 遊び場	家の中	中と外	外
同じクラス	78.9	74.2	82.9
となりのクラス	8.0	23.1	36.1
違う学年	28.4	34.2	31.3
違う学校	7.0	8.8	4.3
兄弟	25.3	12.3	11.3

一緒に遊んだ割合
○印は、横列の最大値

表3 一緒に遊んだ理由×遊び場所

(%)

遊んだ理由 \ 遊び場	家の中	中と外	外
約束していた	75.3	62.2	61.1
帰宅後、さそわれた	16.9	17.2	8.4
友だちの家に行った	6.7	10.3	6.5
いつもの遊び場に行った	1.1	10.3	24.0

○印は、横列の最大値

表4 遊び時間×遊び場所

(%)

時間 \ 遊び場	家の中	中と外	外
30分以下	3.3	3.2	5.1
30分～1時間	30.3	15.9	23.4
1時間～2時間	28.3	26.2	24.7
2時間～3時間	26.1	23.0	20.9
3時間以上	12.0	31.7	25.9

○印は、横列の最大値

表5 遊び場所×天気

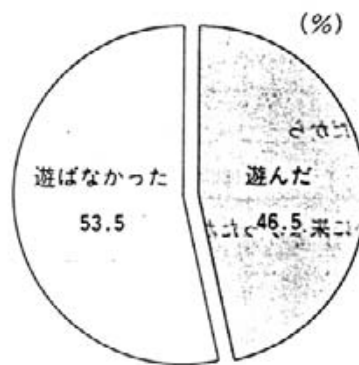
(%)

遊んだ場所 \ 天気	晴れ	くもり	少し雨	雨
家の中で遊ぶ	69.6	22.8	3.3	4.3
家の中と外で遊ぶ	74.4	20.8	3.2	1.6
外で遊ぶ	67.5	23.1	5.0	4.4

2. 遊びを支えているもの



冒頭のグラフをもう一度かかげるが、なにはともあれ「友だちと遊んでいた」という46.5%は、それなりに友だちと関わり、楽しい放課後の一時をすごしていたにちがいない。そうした中で左側の「友だちと遊ばなかった」53.5%が気にかかる。子ども時代をふりかえてみると、毎日の生活のハイライトは放課後の中にあつた。学校から帰ると、カバンをほうり投げ外にとび出し、まっ暗になるまで遊んだ毎日だったことを思い出す。一日の生活の中で、この時間帯が一番楽しい時間であるはずなのに。



◆◆ 友だちと遊ばなかった子ども ◆◆

とすると、なぜ友だちと遊ばなかったのか。その理由は図12に示すとおり、「塾や習いこ

とに行った」が最も多く44.4%、「用事があったから」というのも32.5%と、子どもたち

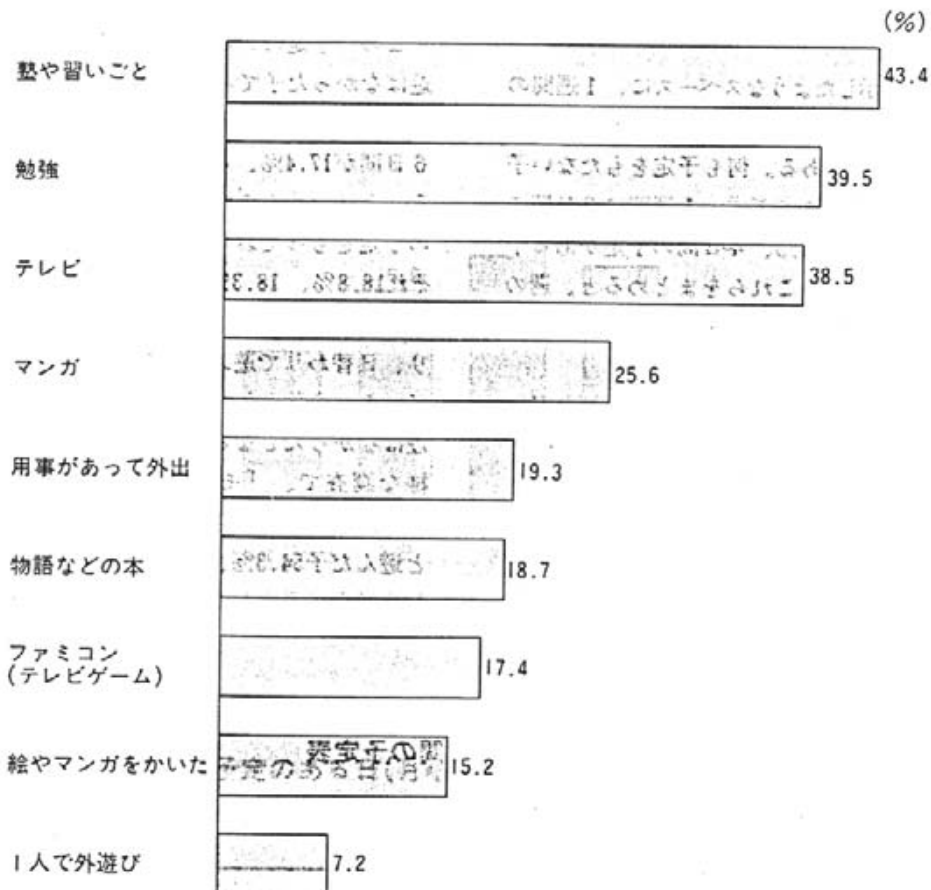
の多忙な放課後の一面を示している。一方、「なんとなく」36.8%、「疲れていたから」26.4%と、活気のない放課後をすごしている子の姿もみうけられる。1人で「勉強、テレ

ビ、マンガ、そして塾へ、習いごとへ」と、昔われわれのもっていた放課後とはなんとほど遠い姿だろう（図13）。

図12 友だちと遊ばなかった理由

	とても+わりと そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない	(%)
塾や習いごとに行ったから	44.4	4.2	51.4	
なんとなく	36.8	10.1	53.1	
用事があったから	32.5	11.0	56.5	
疲れていたから	26.4	14.8	58.8	
勉強でいそがしかったから	21.3	22.1	56.6	
学校で十分遊んだから	17.0	16.8	66.2	
遊べる友だちがいなかったから	12.1	11.9	76.0	
兄弟と遊んだから	10.5	10.1	79.4	
誰もさそいに来なかったから	10.1	12.3	77.6	

図13 一人でしていたこと



◆ 時間、空間、仲間 ◆

なぜ子どもたちは、狭くてきゅうくつなはずの家の中にとじこもっているのか。子どもたちの活動的な遊びを支える3つの条件である“時間”“空間”“仲間”について検討していこう。

資料1に示したようなスペースに、1週間の放課後の予定を書いてもらった結果を整理したものが図14である。何も予定をもたない子は全体の8.2%にすぎず、1週間に3日間の予定がある子18.4%、4日間の予定がある子は17.7%となる。これらをまとめると、週の半分以上予定をもっている者は、全体の5割近くに達する。

たとえば、同じスポーツクラブに同じ日に一緒に行っているなどの条件がそろえば、その子どもたちは毎日遊べるだろう。しかし、それはきわめてまれなケースであり、もしそうであっても、その遊びはその子どもたちだけの少人数の遊びに限られてしまう。友だち

と放課後の時間を共有することが非常に困難であれば、前章でみようと似たような「遊び場に行ったら誰かがいて、そこで遊んだ」といった状況が成り立つはずがない。

この「予定のある日」を、昨日遊んだ子と遊ばなかった子でみたものが図15である。やはり遊ばなかった子は予定を多くもっており、6日間が17.4%、4日間以上ではほぼ5割になる。とはいうものの、昨日遊んだ子もかなりの予定をもっており、3日間、4日間がそれぞれ18.8%、18.3%いる。昨日遊んだ子どもたちも、明日は遊べないのかもしれない。つまり、日替わりで遊ぶ子、遊ばない子が変わっていき、全体としては、5割が遊び、5割が遊ばなかったとなるのであろう。ちなみに同様な調査で、『モノグラフ・小学生ナウ』vol.6-12「子どもの放課後」では、友だちと遊んだ子54.3%、筆者らのグループが日本教育学会で発表したときの調査では54.0%と

資料1 1週間の予定表

よう日	あなたの予定
月	
火	
水	
木	
金	
土	

いう結果であった。

次に、子どもたちの遊び場についてみていく。都市の空間が子どもたちの遊び場としてふさわしくないことは言うまでもない。しかし、子どもたちが遊ぼうと思えば、けっこういろいろな場所にスペースがあることも確かな事実である。それでは子どもたちは自分のまわりにどのような遊び場があると思ってい

るのか、それを図16に示した。

まずこの3つのスケールについて考えてみる。「すぐ行ける所にある」は、いつでも使える遊び場を、「少しはなれた所にある」は、遊びに行こうとすれば行ける遊び場を、そして「とても遠くにある」は、とうてい遊ぶことはできないと思いこんでしまっている状態を示している。つまり、これは自然環境とし

図14 予定のある日(月曜日から土曜日)

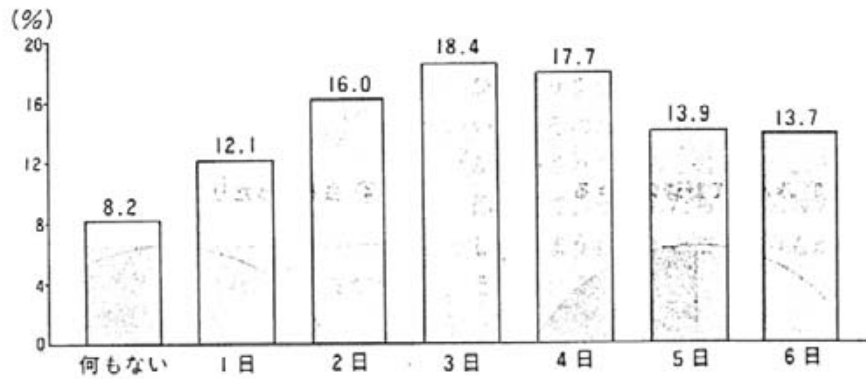


図15 予定のある日(月曜日から土曜日)×遊びの有無

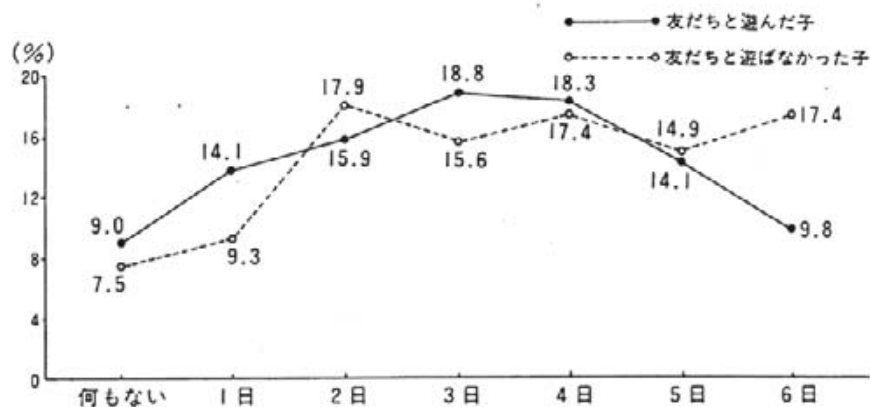
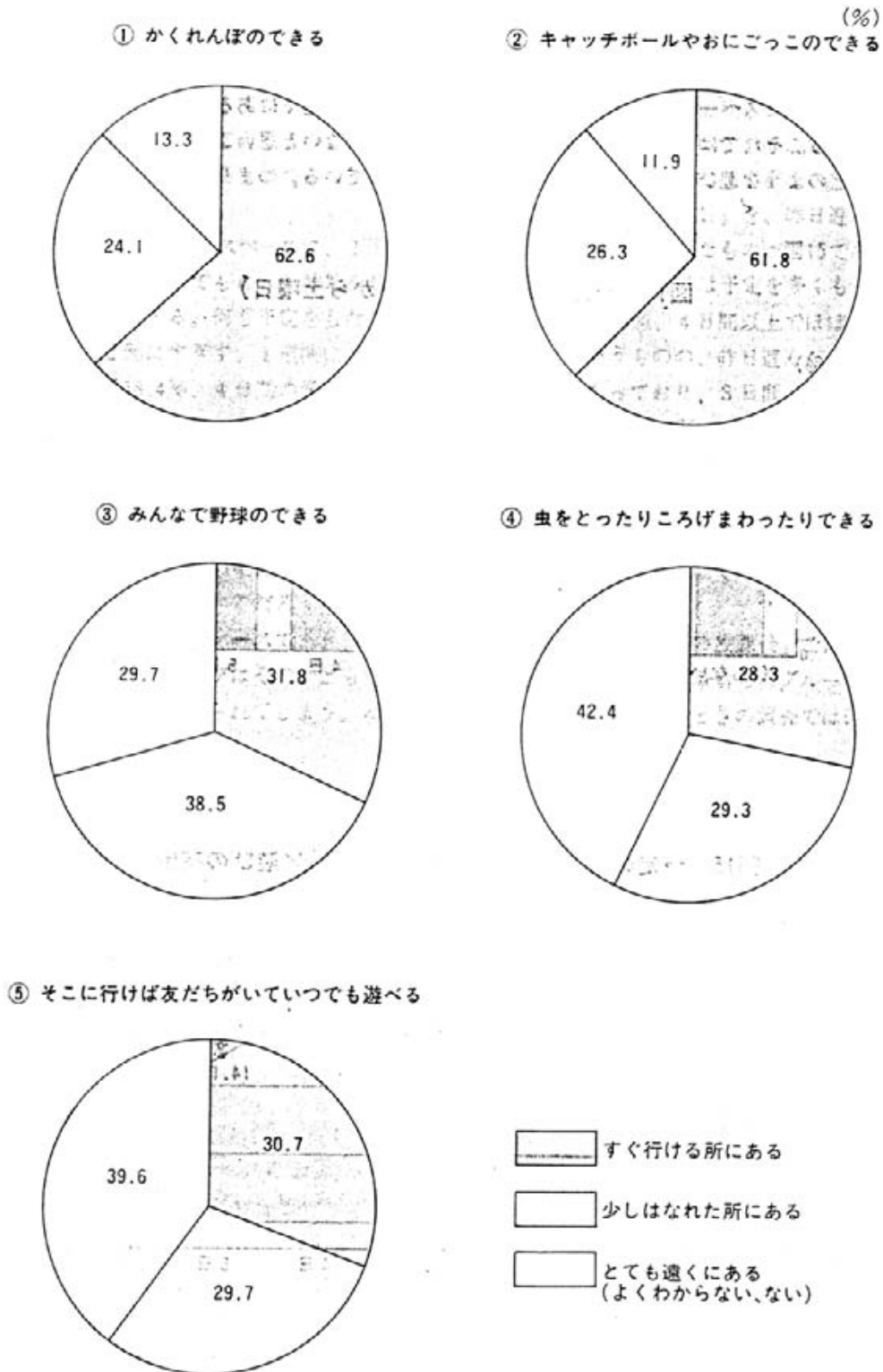
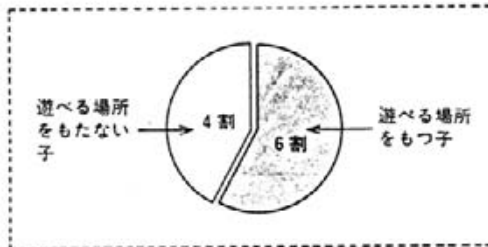


図16 子どもたちのまわりの遊び場



ての物理的な側面と、心理的な距離の近さの両方が作用して表れた結果といえる。

①、②のかくれんぼや、おにごっこやキャッチボール。これはわりと狭いスペースでもできる遊びだと思われるが、「すぐ近くにある」と答えた子は6割しかいない。③、④のみんなで野球、虫とりなどは、都市には難しい遊び場の条件と思われるが、ほぼ3割が「すぐ近くにあり」、6割～7割が「少しはなれているが遊べる」と答えている。これらの①～④のグラフを重ねると、おおまかに下の図のようになる。



そしてこれは、⑤の「そこに行けば、友だち

がいていつでも遊べる」遊び場をもつ子のグラフとほぼ一致するのである。

子どもにとっての遊び場の有無は、子どもの遊び欲求の有無に等しいと言えるのではなからうか。そしてそれを支えているのが遊び友だちではないだろうか。

さて遊び友だちについて尋ねた結果が、次の図17である。休み時間は、「大勢いる」と「わりといる」を合わせると77.8%に達しているものの、帰宅後は「大勢いる」は9.8%、「わりといる」を含めても5割に満たない。そしてその中に、他のクラスの子や他の学年の子はあまり入っていない。つまり子どもたち同士の関わりがクラスに限定され、それをひきずりながら帰宅後の仲間関係が存在している。そのため、子どもたちの放課後の遊びが縮小されていると言えよう。そしてその原因として、子どもたちの放課後の時間を分断してしまう塾、習いごとの存在がある、とまとめられるだろう。

図17 遊べる友だちの有無

	大勢いる				わりといる		2～3人 ほとんどいない	
	35.4	42.4	18.8	3.4	9.8	37.5	37.6	15.1
休み時間	35.4	42.4	18.8	3.4	9.8	37.5	37.6	15.1
帰宅後	11.6	27.2	29.4	31.8	6.6	21.9	29.3	42.2
違うクラスの子	6.6	21.9	29.3	42.2				
違う学年の子								

3. 遊び体験の変化



子どもたちの中に外遊びが減少し、遊び仲間が均一化し、縮小してきている姿をみてきたが、それに伴って、子どもたちの遊び体験

も大きく変化してきている。そこに、子どもたちの成長にとっての数々の問題点が生じてくると考えられる。

◆◆ 失われていく遊び ◆◆

室内遊び、外遊び、昔からの遊び、新しい遊びなどを36個用意し、「これまでに1度でもしたことがあるか」と尋ね、その結果を体験者の多い順に並べたものが図18である。室内遊びのトップは「トランプ」、外遊びでは「どろけい」でそれぞれ94.8%、91.2%とほぼ全員が体験している。

室内遊びについてみていくと、「ファミコン」「オセロ」と新しい遊びの体験者が上位を占め、子どもたちの遊びの中に、これらが

定着してきている様子うかがえる。一方で、「おりがみ」「カルタ」の8割、「あやとり」7割など、かつては室内遊びの中心であったものにも未体験者がでてきている。さらに「お手玉」「つみき」などは、体験者が6割を切っている。これらはいずれも、小学校低学年までの遊びが多いから、現在未体験の子どもたちは、こうした遊びをしないままおとなになっていくのであろう。

また外遊びでは、「どろけい」「おにごっこ」

図18 今までにしたことのある遊び

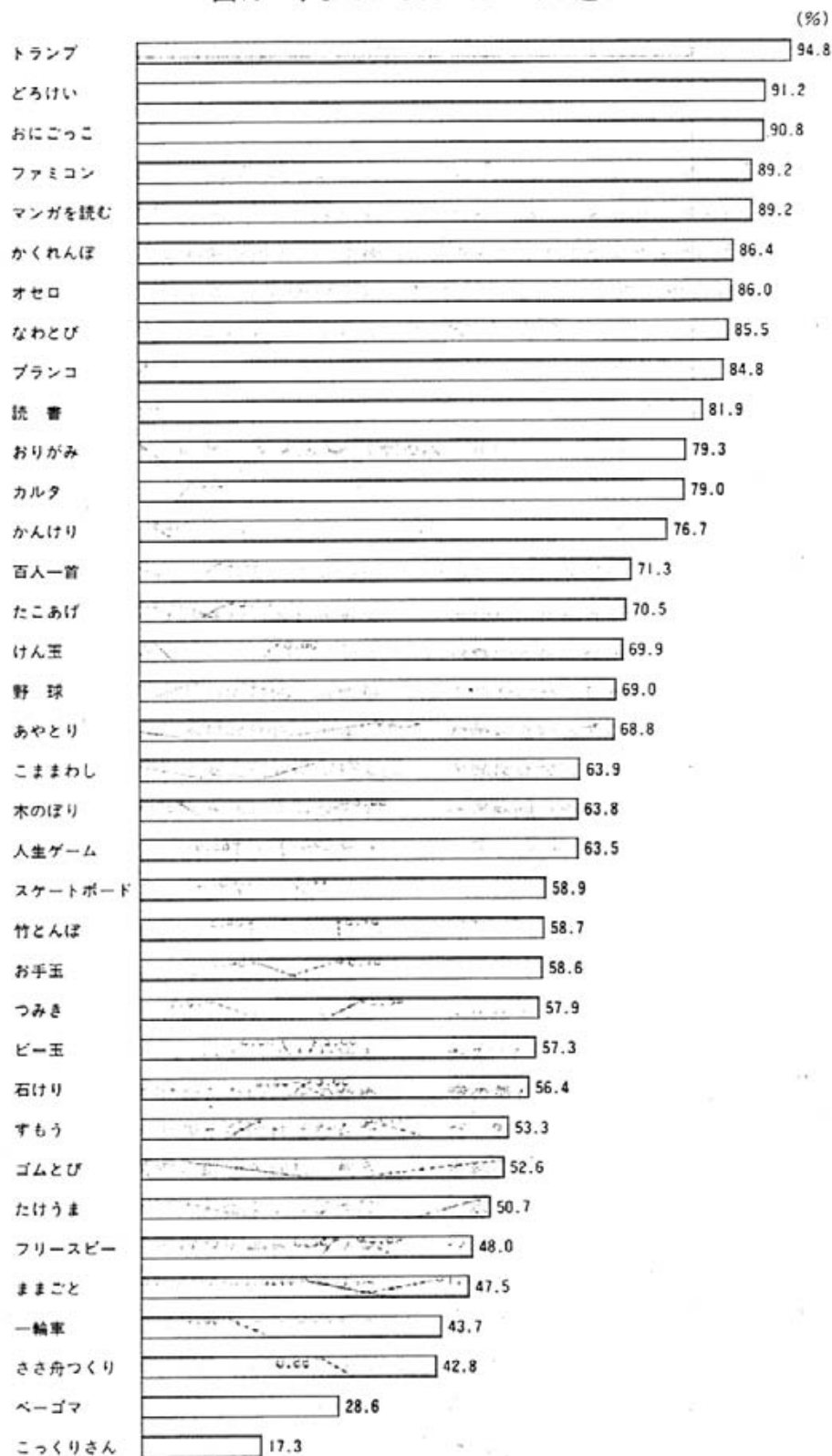
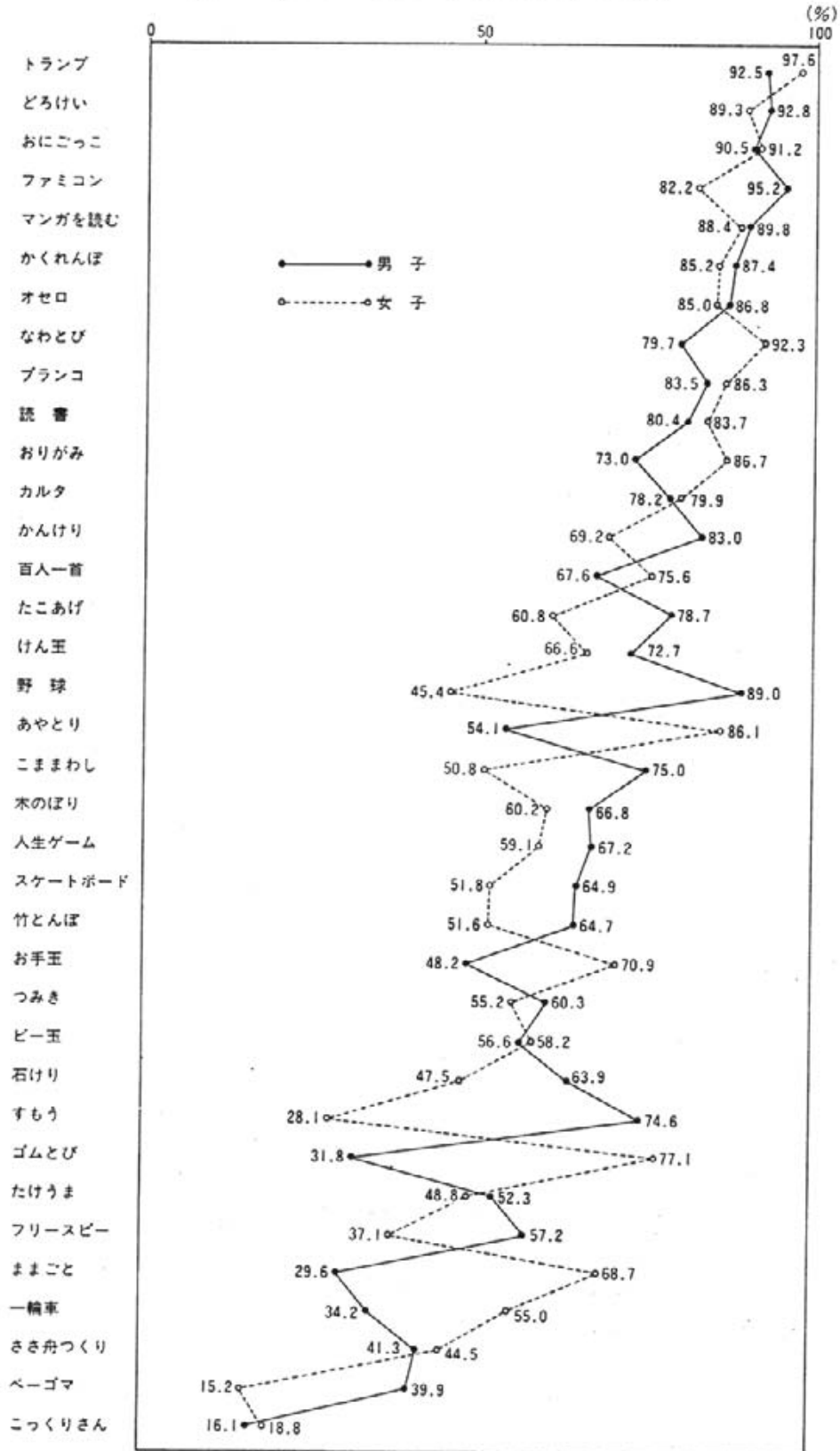


図19 今までにしたことのある遊び(性別)



「かくれんぼ」「なわとび」「ブランコ」などの数値は高いものの、しかし未体験者も1割前後いる。また、かつて子どもの中で主流を占めていた遊びの未体験者の割合を並べていくと、「たこあげ」29.5%、「こままわし」36.1%、「ビー玉」42.7%、「石けり」43.6%、「すもう」46.7%となる。以前なら、誰でも1度は体験したことがあった遊びである。未体験者がまた未体験者を再生産し、徐々に子どもの世界からこれらの遊びが消えていくので

あろう。昔の子どもとしては悲しい思いがする。

さてこれらの項目を男女別にみたものが、図19である。男女差の一番大きなものは「すもう」、そして「ゴムとび」「野球」「ままごと」と続く。しかし、全体的に男女を表すグラフの線はかなり近よりながら動いており、男女差がなくなってきたように思われる。とくに、新しい遊びが、そうした傾向にある。

◆ 失われていく遊び体験 ◆

失われていくものは、遊びの種類ばかりではない。遊びを通して身につけていくさまざまな体験にも変化があるはずだ。それをみようとしたものが図20である。

これらの項目には子どもの成長にとってかけがえのない要素が、多種類含まれている。たとえば「遊びのルールを変えた」について、野球を例にあげて考えてみよう。筆者らが子どもの頃、放課後男の子はいつも野球をしていた。そしてそこには、小学校低学年から中学生まで、さまざまな学年の子どもたちが集まっていた。そうすると、「上級生は、利き腕でないほうで打つ」とか、「小さい子にはゆるい球をなげる」とか、人数が少ないときには「三角ベース」にするとか、いろいろな方法を考えないと、楽しい遊びにならない。そのため、必然的に遊びのルールを変えなければならないことになる。そしてその遊びを通し、利き腕でなくてもボールを打てるようになったり、小さい子をかばう気持ちが生まれたりしてくる。そして、ここにあげた体験の内容はそれぞれ子どもの成長にとってとても大切な

ものはずだが、困ったことに楽しい遊びを通しての副産物である。大切だからといって意図的に体験させることはできない。まさに自発的な外遊びの中からしか生まれてこないものなのだ。しかもこれらは、1、2度体験したからといってなかなかすぐには子どもたちを成長させてくれない。何度か、いやできれば多数回の体験をする必要がある項目が多い。

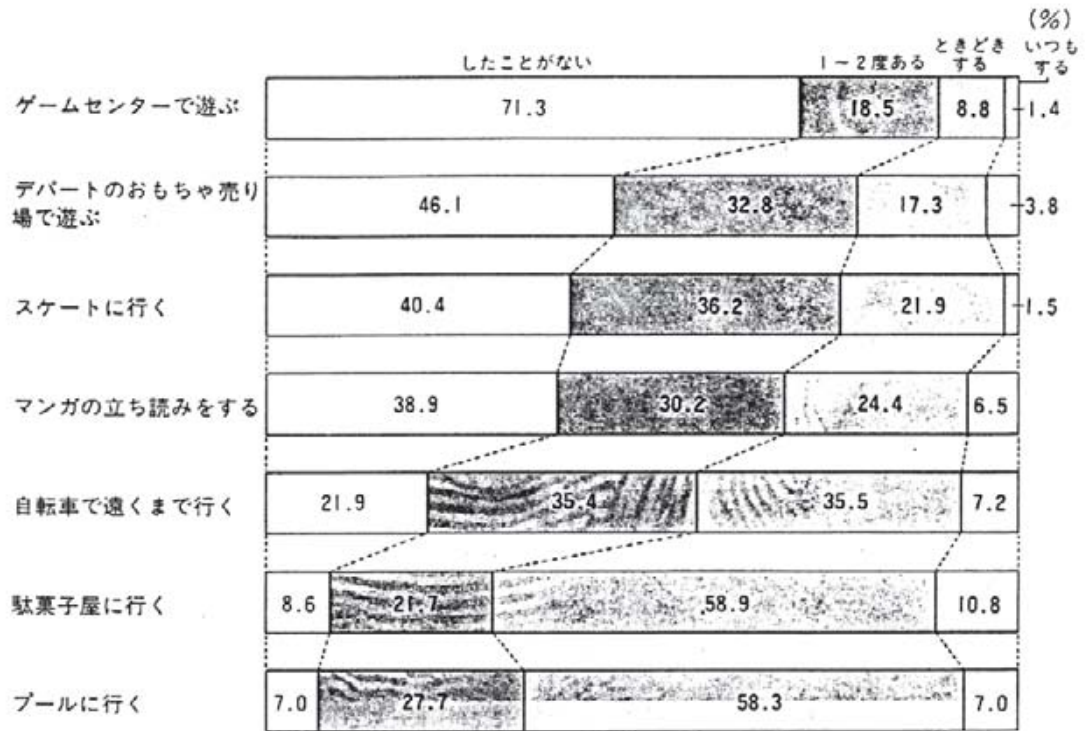
そう考えてデータをみていくと、「遊びのルールを変えた」ことがかなりある者は16.3%、「まっ暗になるまで外で遊んだ」23.8%、「服やくつをどろんこにした」18.9%など、以下、10%~20%の数値が続く。子どもたちの体験率の低さを目の当たりにして、心配になる。(この20%弱という体験の数値は、第1章の最後でまとめた「昨日、外で友だちと遊んだ」20%の子どもたちと、いみじくも合致する結果であった。)

最後に図21に、「最近の子どもたちの遊び」の体験を尋ねた。「プール」「自転車の遠のり」「スケート」など、子どもたちの遊びは昔と大きく変化していることがわかる。

図20 遊びを通しての体験

	1度も ない	1-2度ある	何度かある	かなりある	(%)
遊びのルールを変えた	13.3	32.6	37.8	16.3	
真っ暗になるまで外で遊んだ	17.8	29.4	29.0	23.8	
服やくつをどろんこにした	16.9	39.4	24.8	18.9	
新しい遊びを考えた	20.0	38.0	28.3	13.7	
帰りがおそくなって叱られた	23.6	41.2	20.7	14.5	
初対面の子と遊んだ	26.0	41.3	22.4	10.3	
とっくみあいのケンカをした	44.0	28.5	16.3	11.2	
夢中になって塾やおけいこごとに行き忘れた	48.2	29.5	14.4	7.9	
遠くや見知らぬ所で道に迷った	59.6	27.9	7.6	4.9	

図21 新しい遊び



4. 遊ぶ子、遊ばない子



子どもたちの遊びの様子をさまざまな角度から探ってきた中で見いだされた問題点の1つは、子どもたちの遊びの質が変化したことであった。つまり、子どもたちが「屋内で、ひとりきりで、体を動かさずに受身の形で」余暇の時間をすごすなど、本来の活動的な遊

びから、「休息型の遊び」に変化してきたことが問題ではなかろうか。そこで最後の章では、子どもを外遊びに向かう子と室内遊びにこもる子に分け、いくつかの視点からその条件についての検討を加えていきたい。

◆◆ 遊び欲求の変化 ◆◆

最近の子どもたちの中には、学校の休み時間ですら、教師が追い出すようにしないと決して外に出て遊ばない子がいる。全体として教室や廊下でおしゃべりをしてすごしている子のほうがふえてきている気もする。テレビゲームの登場やビデオテープの普及など、さまざまな室内遊びの刺激的な機器の導入により、子どもたちの遊び心にも変化がおきてい

るのではなかろうか。

そこで図22では、子どもたちの遊び心の変化を探るため、①で室内遊びに向かう気持ちを、②で遊び友だちの変化を、③で遊び欲求の変化をあげた。図が示すように大部分の子どもたちは、「室内で遊ぶよりは外で遊びたい」と考えており、また「友だちは少人数より多いほうがいい」、そして「放課後も遊び友

だちは多くほしい、そして、もっともっと遊びたい」と、子どもらしい遊び欲求を示している。

しかし少数派ではありながら、天候が不順ならば「外で遊ぶより家の中にいたい」と思う子26.1%や、「3～4人の仲良し友だちがいればいい」と思う子31.9%など、室内遊びに向かう傾向の子もみられる。子どもたちの遊びに向かう気持ちの中にも若干の変化がでてきているようである。

そこで外で活動的な遊びを好む子（外遊び群）と、室内での遊びを好む子（内遊び群）を資料2のような方法でグループングし、子どもたちの中に遊び心の変化が生まれた原因と、日常生活の様子を探ってみよう。

まず第2章で考察した遊びを成立させる3つの条件からみてゆこう。図23に示した放課後の予定は内遊び群も、外遊び群もほぼ同様である。そして次の図24の遊び場所についても、全体的に内遊びのほうが少ないと言って

図22 遊びに向かう気持ち

		(%)		
		とても+わりと そう思う	少し そう思う	あまり+ぜんぜん そう思わない
① 外遊び・内遊び	寒い日や暑い日は、外で遊ぶより家の中にいたほうがいい	26.1	28.5	45.4
	外で遊ぶより、テレビを見たりマンガを読んでいるほうが好き	17.8	21.7	60.5
	休み時間は外で遊ぶより、教室でおしゃべりしているほうが好き	15.7	15.5	68.8
	休み時間、外に出るのは面倒だ	9.6	12.8	77.6
② 友だち	大勢で遊ぶより、3～4人の仲良しと遊ぶほうがいい	31.9	16.4	51.7
	放課後、遊びたくても近くに遊ぶ友だちがいらない	15.2	15.2	69.6
③ 遊び欲求	今よりもっと多くの遊び場所がほしい	78.3	10.0	11.7
	今よりもっと多く遊ぶ時間がほしい	72.6	12.4	15.0
	今よりもっと多くの遊び友だちがほしい	56.3	18.6	25.1

いるが、それほど大きな差は認められず、自分の意識が外に向かないため少ないと思っ
ているだけであろう。つまり、時間と空間は少
ないながらもどちらのグループの子どもたち
ももっており、そのことが子どもたちの遊び

心を変化させているとは言えないようである。

一方、遊び友だちを尋ねた図25では各項目
とも10%以上のひらきがあり、休み時間は両群
に25.9%、帰宅後は18.9%の差がある。外遊
び群と内遊び群の大きな違いは、遊び友だち

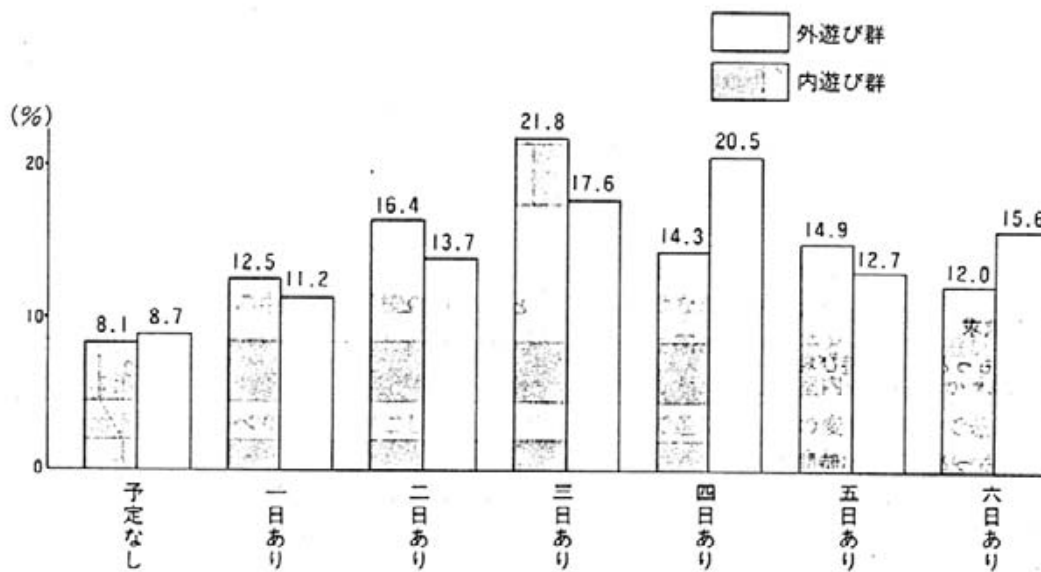
資料2 外遊び群、内遊び群加算点の算出方法

図22①の4項目について以下のように点数化し、加算点を算出する。



内遊び群	中間群	外遊び群
4点～13点 (31%)	14点～16点 (33%)	17点～20点 (36%)

図23 放課後(月～土)の予定×遊び志向



の有無のではなからうか。

さてそれでは、外遊びに向かう子と室内遊びを好む子は、どんな気持ちで毎日の生活を送っているのか。表6～表9に示すように、外遊び群は友だちが多く、食欲があり、でき

ないこともできるようにがんばろうとし、将来、幸福になるだろうと、すべての項目にプラスイメージで答えている子が多い。一方、内遊び群は、自分に対して自信のない様子が見受けられる。

図24 遊び場所×遊び志向

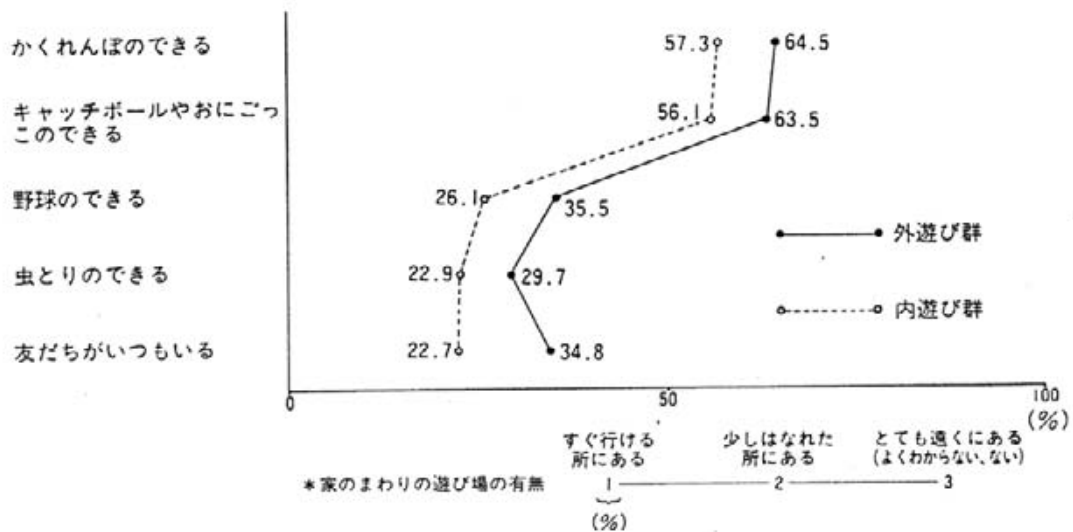


図25 遊び友だち×遊び志向

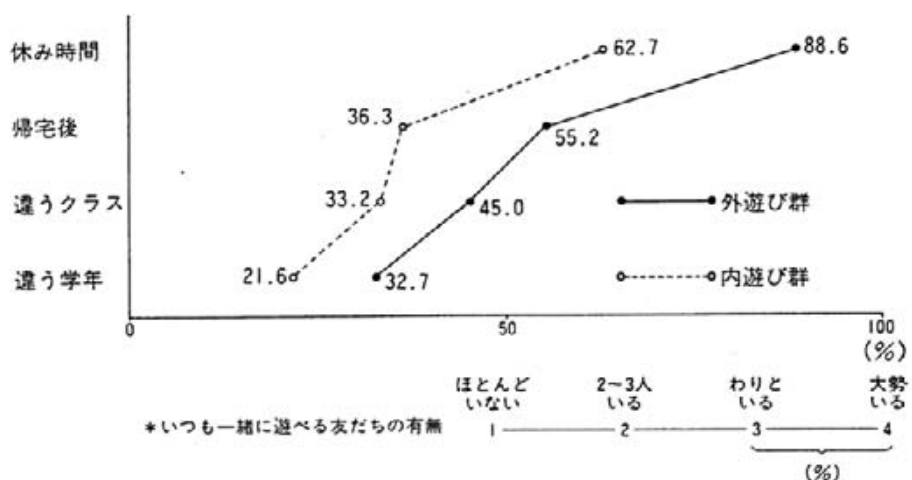


表6 友だちの有無×遊び志向

(%)

友だちが たくさんいる	遊び志向群	内遊び志向群	中間群	外遊び志向群
とてもそう		24.9	29.4	48.6
わりとそう		38.7	43.7	35.4
少しそう		23.0	16.8	10.7
あまりそうでない		10.6	8.8	4.1
ぜんぜんそうでない		2.8	1.3	1.2

○印は、横列の最大値

表7 食欲×遊び志向

(%)

残さず食べる	遊び志向群	内遊び志向群	中間群	外遊び志向群
とてもそう		27.6	31.1	41.8
わりとそう		19.1	26.9	23.1
少しそう		20.2	15.9	17.2
あまりそうでない		23.0	18.8	13.8
ぜんぜんそうでない		10.1	7.3	4.1

○印は、横列の最大値

表8 がんばり度×遊び志向

(%)

遊び志向群 できるまで がんばる	内遊び志向群	中間群	外遊び志向群
とてもそう	7.6	10.0	15.6
わりとそう	22.5	27.5	33.1
少しそう	31.3	35.5	34.8
あまりそうでない	33.2	24.3	14.1
ぜんぜんそうでない	5.4	2.7	2.4

○印は、横列の最大値

表9 幸福感×遊び志向

(%)

遊び志向群 将来、幸せ	内遊び志向群	中間群	外遊び志向群
とてもそう	18.6	19.7	25.4
わりとそう	18.0	22.4	24.7
少しそう	30.7	26.9	30.8
あまりそうでない	21.7	22.9	12.6
ぜんぜんそうでない	11.0	8.1	6.5

○印は、横列の最大値



まとめに代えて

まとめに当たって、学校での子どもの遊びの状況を示したものが図26である。休み時間、友だちと外で遊んでいる者が、「いつも」と「わりと」を合わせると72.2%に達する。教室でおしゃべりしたり廊下などで遊んでいる者も若干みられるが、いつも本を読んだりして1人ですごすと答えている子どもたちは少ない。限られた時間ではあるが、学校においては、友だちとの外遊びが放課後よりはるかによく行われている。

これまでみてきたように、地域の中から遊び集団が消え、放課後の生活も学校での遊び仲間がひきずっている以上、子どもたちの遊びの再生への道は、残念ながら学校にしか残されていないような気がする。学校で遊びの

楽しさを、仲間と一緒に活動する楽しさを味わわせ、遊びの中心となるリーダーを育て、異年齢集団の関わりをもたせ、その中から地域の遊び集団を復活させるプログラムを組まなければならないのかもしれない。

子どもたちの中で年上の子から年下の子へと、何世代もの子ども集団を通してうけつがれてきた子ども文化、それは本来、学校のような管理された場所から再生されるはずはないとも考えられる。しかし、現代の子どもたちをみている限り、本来の遊びを子どもたちが取り戻せるように、学校が、おとなが、とにかく何か援助の手を差し伸べなければならない時期がきているのではなからうか。

図26 学校での遊びの状況

